

# 歴史の狭間に埋もれた偉人・カルシュ博士

東京医科歯科大学 若松秀俊



フリッツ・カルシュ博士  
(1893-1971)

大正14年より14年間にわたり、旧制松江高等学校（現・島根大学）で教育に力を注いだドイツ人哲学者フリッツ・カルシュ博士がいる。彼は、日本の哲学や宗教の研究者で教育者であり、昭和15年から5年間は外交官でもあった。彼の薫陶を受けた著名人には「長崎の鐘」で知られる永井隆、免疫学者の奥野良臣をはじめとする科学者、著名な政治家の赤澤正道、福永健司、細田吉蔵、それに文学者、法律家、外交官など枚挙に暇がない。当時の朝鮮、台湾からの学生で、戦後に故国の復興などに尽力した有能な医師、技術者などもあげることができる。ラフカディオ・ハーンと並ぶ功績を残した同博士は、数多くの優れた風景パステル画、歴史的写真、それに専門著書、関連図書と膨大な未整理の研究原稿を残している。戦中・戦後の混乱により歴史の狭間に埋もれた、偉大なカルシュ博士について、その足跡が広く国民に知られることを心から念じ、1999年以来、日本国内、ドイツおよび米国で蒐集した関連資料の永久保存のために、歴史的価値のある松江市奥谷町の旧住居を記念館として改修・復活する呼びかけを行ってきた。

カルシュの調査を始めてから21年になる。多くの偶然が重なりあう中で、カルシュの遺族との僅か5分間の出会いがきっかけであった。調査をもとにして得られた、膨大な資料と写真から彼の当時の生活や生徒との交流をほぼ再現できたが、調査を始めて間もない頃に協力してくれた同博士の愛弟子は殆どがすでに他界してしまった。彼らの残してくれた言葉や手紙を時に想い出す今日この頃である。ドイツの文化と風土に、若き日に触れる機会をドイツ政府から与えられた小生がシュトゥットガルトの小さなホテルでカルシュ博士の次女に偶然に出会って、このような仕事に携わることになったのは、小生に賜った天命と考えて調査・顕彰に尽力してきた。

カルシュが14年間住んだ松江市奥谷町の「官舎」が一時は大学当局の取り壊しの決定にも拘わらず、地方新聞社との共同の保存呼びかけが文化財登録への道を開いた。2009年10月に官舎の保存修理が完了の運びとなった。調査の結果とともに、報道機関、松江郷土館の企画展示会、日独協会の顕彰記事のお陰で、カルシュのことが世の中に知られるようになったからであった。それが、NHK松江放送「しまねっと：ドイツ人教師の住宅を保存へ」と進展し、島根大学による文化財登録の申請の運びとなった経緯がある。やがて小生が管理しているカルシュの遺品（膨大な哲学の未発表原稿、写真、絵画、調度品など）も広く世に公開できるものと期待している。というのも広く彼の残した足跡が全国的に確認できるからである。

カルシュには現代の教育に大きく影響を及ぼしている人智学と哲学者シュタイナーを日本に紹介した大きな業績がある。一般には戦後に紹介されたと言われているが、1925年来日したカルシュ夫妻が交わした1923年当時のシュタイナーに関するノートが現存し、スイスのゲーテアヌムでのシュタイナー信奉者同士の交流も確認されている。なおシュタイナーの思想の流布については、昭和10年頃を境にヒトラーによって禁じられたが、密かに彼は日本国内でシュタイナー思想を広めていたことが知られている。戦後これが復活して、日本でもシュタイナー学校が創られ、最近は一貫教育の象徴となっており、教育史上、カルシュは重要な位置を占めている。多くの宗教哲学者（三笠宮崇仁殿下、西田幾多郎、鈴木大拙、高橋敬視、長屋喜一）との交流も記録とともに確認されている。さらにカルシュが当時の高校生への講義のなかで、「西暦2000年頃、ヨーロッパ文明が自己矛盾から他との軋轢が各所で生じること」を語った注目すべき記録を見ることができる。

1968年に彼を慕う、かつての生徒らが発起人となって日本に招待したことがある。教育の荒廃が各所で声高に叫ばれているさなか、彼が教育者としてハーンとは全く別の教育の見本を残した大きな貢献と、生徒や近隣の人々との密な交友から彼の存在の偉大さを評価するの必要を感じている。

カルシュの親類には1937年ショパンコンクールで入賞したピアニスト、チェンバリストであるエディット・ピヒト・アクセンフェルト（元フライブルク音楽大学教授）がおり、多くの日本人弟子を残している。また、モラクセラ・ラクナータ菌を発見し、現在の眼科学に大きな影響を及ぼし、訪日した世界的権威のテオドル・アクセンフェルト博士（元フライブルク大学教授）がいる。なお、現在ベルリンの博物館に歴史的重要な資料として厳重保管されている「ヒトラーの行動記録(16冊)」を戦後ミュンヘンで押収し、保存していたのが長女メヒテルトの夫ヘルベルト・セイント・ゴアールである。ライン川流域のセイント・ゴア市の200年前の富豪で、市長を勤めたラツァルス・セイント・ゴアールは彼の祖先である。それ以前の宗教上の功績から聖の称号を授与されている。近年、顕彰されて子孫がドイツから大歓迎を受けた。また、メヒテルトの母方の祖先のエリザベートが聖職者（未確認）ということでもある。カルシュには、戦後復興に活躍した多くの著名人を育てただけでなく90年前の出雲の地や日本各地の貴重な記録を後世に残した功績や、さらに周囲にも多くのことが語り継がれている、松江にとどまらず全国に誇るべき偉人である。現在、長女メヒテルトはアメリカでシュタイナーの人智学の中心人物で、次女フリーデルンは戦後のシュタイナー学校（自由ヴァルドルフ学校）出身で、マールブルク大学で政治学、地理学の2つの学位を取得し、同じ自由ヴァルドルフ学校でシュタイナー教育に永年携わり、現在も継続的に活躍している。そして、直接に彼女から二代にわたって教育を受けた日本人にも辿り着くことのできるほど、カルシュの影響の拡がりを世界中にみることができる。

カルシュ博士 略歴 ブラゼヴィッツに生まれる(1893), 市立小学校入学(1899), 父ヘルマン急死(1901), 王立ドレスデン・ノイシュタットギムナジウム入学(1903), ブラゼヴィッツ職業ギムナジウムに転校(1906), ドレスデン国際博覧会参加(1911), 大学入学資格試験合格・ドレスデン工科大入学(1914), 第一次大戦時、通信兵として従軍・復員(1914-1918), マールブルク大入学(1919), エンメラと結婚(1921), 哲学博士授与(1923), 松江高等学校着任(1925), アクセンフェルト教授来日、各地を案内(1930) ドイツ一時帰国・親類との交流(1931), 松江高校退任・ドイツ帰国(1939), ドイツ大使館勤務 副武官(1940-1945), マールブルクへ強制送還(1947), 三笠宮崇仁殿下主催のパーティに招待(1960), 年金生活(1967), アルベルト・コルベ・ハイム(老人ホーム)入居(1967), 旧制松江高校同窓会の日本訪問招待(1968), カッセルで死亡(1971), 若松とフリーデルンとの偶然の出会い(1999), 日独文化交流の架け橋の功労者として日独協会が森鷗外らとともに紹介(2005)。

以下、若松秀俊による蒐集・所有の資料の主なものを挙げる。

《絵画：パステル画、水彩画》カルシュ自筆と他を含め約100枚、《著書、印刷物》「ハルトマンの哲学」長屋との共著 東京中文館(1937)、「新形而上学」哲学講座 フリッツ・カルシュ著 近代社(1939), 《カルシュ自身の撮影写真》約2,000枚 1925-1939 松江および関東以南周辺。

Fritz Karsch: Das Freiheitsproblem bei Kant und Nicolai Hartmann. Heft-1 日独文化協会(1928)など。

《訪問記録帳》日本・ドイツでの交遊記録帳(哲学者鈴木大拙、長屋喜一、奥野良臣などの署名)。

《講義録》カルシュ教授の講義録および試験・宿題 添削 宮田正信所蔵。その他、カルシュ個人に関する公的証明書多数。「フリッツによる思い出」、小学校時代の成績表、ギムナジウム卒業時発表会資料、カルシュ自筆の色紙、歴史的写真、《哲学博士学位証明書と旧制松江高校職歴書》など。

調査の証拠、ホテル・アム・フリーデン・プラッツ 宿泊領収書、フリーデルンの住所のメモ(紙片)、顕彰発起人(中村同窓会長)らによる松江高校同窓会への呼び掛け、ケストナー駐日ドイツ大使およびドイツ学術交流会東京所長リンス博士の調査激励文。日本週間におけるマールブルクでの三笠宮殿下のパーティ招待状、カルシュ宛の赤澤自治相(佐藤内閣)自筆招待状および旧生徒の手紙・写真・卒業アルバムなど。同窓会関係資料、カルシュ旧生徒および同窓生の手記、他に学生より提供された国内写真500枚ほど。

若松による主な著作

- ① 若松秀俊「忘れ得ぬ偉人」マツモト(2002年1月)
- ② 若松秀俊「湖畔の夕映え カルシュ博士と松江」文芸社(2002年6月)
- ③ 若松秀俊「四ツ手網の記憶」ワンライン(2007年7月)
- ④ 若松秀俊「朝霧の瀬」財形福祉協会(2012年2月)
- ⑤ 若松秀俊「縁の環」財形福祉協会(2012年2月)
- ⑥ 若松秀俊 写真集 1「松江の誇り」2「大山その眺望」3「神社仏閣 島根」4「田園風景」5「近隣の人々」6「旧制松江高校」7「風光の美」8「水の都 松江」9「故郷と友情」10「軽井沢その周辺」11「日本海の眺望」各集 マツモト(2015年10月-2016年1月)
- ⑦ 若松秀俊「カルシュによる絵画集」マツモト(2016年1月)
- ⑧ H.Wakamatsu 「Erinnerungen aus dem Viereckigen Tauchnetz」Matsumoto(2016年3月)
- ⑨ 若松秀俊「新版四ツ手網の記憶」杉並けやき出版(2017年1月)

若松による新聞連載、出版など

- ① 日独協会機関誌「かけ橋」カルシュ住居に関する記事 2001年5月号表紙
- ② Die Brücke 日独文化交流を支えた旧制松江高等学校教官カルシュ博士 2001年9月号7-8頁
- ③ Brückenbauer Pioniere des japanisch-deutschen Kulturaustausches 158-163, Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin Japanisch-Deutsch Gesellschaft Tokyo(2005).
- ④ Die Brücke 「神々の里に美と心の安らぎを見たカルシュ博士」2008年3月号1頁
- ⑤ 若松秀俊「第二のラフカディオ・ハーン」致知 2002年9月号 87~88頁
- ⑥ 若松秀俊「カルシュの足跡を追って」山陰中央新報 連載32回 2003年5月~12月
- ⑦ 島根日日新聞「神々の里に見た美と安らぎ」 2005年1月1日
- ⑧ 読売新聞「島根の記憶」連載15回 2004年7月~12月
- ⑨ 朝日新聞「ドイツ人哲学者がみた島根・日本」連載35回 2008年6月11日~2009年3月
- ⑩ 日本インターネット新聞 カルシュ博士 3連載・合計45回 2010年5月~2010年12月

カルシュに関する主なテレビ放送：NHK 松江放送局、民間放送局2回と合同で4回

《フリッツ・カルシュ》山陰ケーブルビジョン 2017年1月1~4日 2月21,23日, 2018年8月再放送

企画展 2004年4月2日~18日、カルシュ14年の足跡 NHK 松江放送局内

企画展 松江を訪れた外国人たち 松江郷土館 2004年4月1日~8月31日

企画展 カルシュ博士と軽井沢 歴史博物館 2013年7月13日~11月15日

企画展 カルシュと大山 夢に見た大山、大山開山1300年記念 2017年6月2~7日

企画展 フリッツ・カルシュ、島根大学、2018年4月29日~7月1日

企画展 ホーランエンヤ写真展 松江歴史館 2019年7月19日~8月25日

企画展 御大典と松江市民 松江歴史館 2019年10月18日~11月20日